Choeur Prière

Choeur Prière

創立50周年 & 黒岩英臣 常任指揮者勇退 記念

クール・プリエール
第39回定期演奏会

2023年 9月18日（月・祝） 1:30pm開場 2:00pm開演

浜離宮朝日ホール

プログラム

Ⅰ．グレゴリオ聖歌～ヴィクトリア宗教曲集

Gregorian chant and Victoria sacred works

1. グレゴリオ聖歌：イエスへの甘美なる思い
   Cantus Gregorianus: Jesu dulcis memoria
2. ヴィクトリア：イエスへの甘美なる思い
   Thomas L. de Victoria: Jesu dulcis memoria
3. 同上：おお、何と大いなる神秘よ
   Victoria: O magnum mysterium
4. 同上：私の目はかすむ（聖週間の応唱より）
   Victoria: Caligaverunt oculi mei (from Tenebrae Responsorium)

Ⅱ．コダーイ合唱曲集

Kodály Zoltán choral works

1. 聖イシュトヴァーン王に捧げる歌
   Ének szent István királyhoz
2. ノルウェーの娘たち
   Norvég leányok
3. 美しい祈り
   Szép könyörgés

休憩

Ⅲ．ブラームス：ドイツ・レクイエム 作品 45

（室内楽伴奏編曲：リンケルマン）

Johannes Brahms: Ein Deutches Requiem Op.45

(Arrangement for chamber ensemble by Joachim Linckelmann)

1. 悲しむ人々は、幸いである *Selig sind, die da Leid tragen*
2. 人は皆、草のようで *Denn alles Fleisch, es ist wie Gras*
3. 教えてください、主よ *Herr, lehre doch mich*
4. あなたのいますところは、どれほど愛されていることでしょう *Wie lieblich sind deine Wohnungen*
5. 今はあなたがたも、悲しんでいる *Ihr habt nun Traurigkeit*
6. 私たちはこの地上に永続する都を持っておらず *Denn wir haben hie keine bleibende Statt*
7. 主に結ばれて死ぬ人は幸いである *Selig sind die Toten*

指揮： 黒岩英臣

ソプラノ独唱（Ⅲ-5）： 大村博美

バリトン独唱（Ⅲ-3, 6）： 千代崎元昭

室内楽（Ⅲ）：プリエール室内オーケストラ

合唱：クール・プリエール

曲目解説

Ⅰ. グレゴリオ聖歌〜ヴィクトリア宗教曲集

第1ステージでは、プリエールの定期演奏会において恒例となっているグレゴリオ聖歌の斉唱に続き、ヴィクトリアの宗教曲を３曲続けて演奏する。

ヴィクトリア（1548-1611）は、ルネサンス末期に活躍したスペイン最大の作曲家の一人である。その生涯において20曲のミサをはじめ多くの宗教曲を残しているが、当時としては珍しく世俗曲を一曲も作らなかったことでも有名である。その音楽様式は、彼がローマでの留学時代に直接学んだ可能性が高いといわれる巨匠パレストリーナの後継とされるが、同時にスペイン的な情熱を秘めており随所にドラマティックな音楽表現を見ることができる。

プリエールでは、黒岩先生との初回の演奏会以来、たびたびヴィクトリアを取り上げてきた。一司祭としてその生涯を宗教的、音楽的生活に捧げたヴィクトリア。彼の完成されたポリフォニー技法を踏まえながらも聴き手の感情に強く訴えかけてくる音楽には、黒岩先生の修道院で若き日を過ごされた敬虔なクリスチャンとしての宗教音楽への深い造詣と、その情熱的な音楽創りに相通じる親和性を感じるところであり、このたびの記念演奏会冒頭の曲目に相応しいと考える所以である。

1〜2. Jesu dulcis memoria　イエスへの甘美なる思い

グレゴリオ聖歌に続き、その第1節を2で歌う。12世紀前半に活動したフランス出身の神学者、クレルヴォーの聖ベルナルドゥスに由来すると伝えられてきたが、同様の詞は中世に広く流布していたともいわれる。本作では、ヴィクトリアらしい叙情的な旋律にのせてイエスを慕う敬虔で甘美な思いが歌われる。

3. O magnum mysterium　おお、何と大いなる神秘よ

イエス・キリストの誕生を祝するクリスマスのためのモテットであり1572年にヴェネチアで出版されたヴィクトリアの初曲集である「モテトゥス集」に含まれている。神秘的な雰囲気をただよわせる旋律が高声部のパートソロから次々に展開され、ホモフォニックな中間部につながってゆく。後半部は晴れやかなアレルヤコーラスとなり神の栄光をたたえつつ締めくくられる。

4. Caligaverunt oculi mei　私の目はかすむ（聖週間の応唱より）

1585年にローマで出版された「聖週間聖務曲集」に収められた聖金曜日（復活祭の直前の金曜日、イエスの受難と十字架上の死を記念する日）のためのレスポンソリウム（応唱）の一曲。詞は旧約聖書中の「哀歌」から取られ、ひとり死にゆくキリストの苦難が静謐かつ感動的な音楽表現により綴られている。

（中島 尚子）

Ⅱ. コダーイ合唱曲集

コダーイ・ゾルターン (1882-1967) は、ハンガリーの作曲家・民俗音楽学者・教育家。「孔雀が飛んだ Fölszállott a páva」等の民謡をモチーフにした曲で、マジャール人の愛国心を高揚させた。

1. Ének szent István királyhoz　聖イシュトヴァーン王に捧げる歌　1938 年作

イシュトヴァーン 1 世は 11 世紀のハンガリー王国初代の王。国内にカトリックを広めバチカンから列聖された。１８世紀に編纂された聖歌集に詞の原型が見られる。元の歌は単旋律の短い聖歌。聖歌とされるが詞は民族主義的で世俗的。コダーイはこの詞に新たに大人数４部混声のメロディーを付けた。

ハンガリーは 16 世紀以降オスマントルコやオーストリアの侵略を受け 18 世紀にはオーストリア帝国の一部となっていた。イシュトヴァーン王時代の栄光を偲び、今の現実を嘆き聖王に救済を請い願う歌である。

2. Norvég leányok　　ノルウェーの娘たち　　1940 年作

ノルウェーのフィヨルドの奥の小さな漁村バルホルム。霧雨の煙る中、民族衣装の娘たちが集うのどかな光景。他愛もない詞であるが。

1940 年、ナチスドイツはノルウェーを攻め占領した。詩人ヴェレシュ・シャンドールは抗議の意を示す詩を書きコダーイの所へ持ち込んだ。当時のハンガリー政権は親ナチスで国内の民族主義者達を抑圧し軋轢を生んでいた。コダーイは持ち込まれた詩に自ら加筆しこの曲を作ったとされる。恐らく元の詩が政権の反感を買い弾圧される事が予想されたので、表向き他愛のない詞に改める事で出版・演奏を可能にし、裏でノルウェーへの連帯・ナチスへの抗議を示そうとしたのであろう。

3. Szép könyörgés　美しい祈り　　1943 年作

詞は 16 世紀の愛国詩人バリント・バラッシの強烈な切迫感を持つ宗教詩。その内容から、出典は旧約聖書のダビデの詩編 (35、22 など）ではないかと推測される。

könyörgés はマジャール語で「祈り」。「祈り」はフランス語でプリエール (prière)。同名の誼みと言うわけではないがプリエールのお歴々はこの曲が好きだ。50 年間の歴史の中で演奏回数が最も多い曲である。ちなみに今回が12回目。

マエストロの指揮者就任 3 年目の 1984 年に初演。この曲のシンコペーションを「イャチャー、イャチャー、と歌え」と熱く指導されたので、以降団内では「ヤチャー黒岩」の異名が定着した。あれから 40 年、我々も冒頭の Nincs már（ニンチマール）という歌詞が「認知まる」に聞こえてしまう年齢になってしまった。

（福本良一）

III. ブラームス：ドイツ・レクイエム　　作品45

ブラームス(Johannes Brahms: 1833-1897）は、4つの交響曲をはじめ、各種協奏曲や変奏曲、室内楽曲、ピアノ曲、声楽曲とあらゆるジャンルにおいて深い音楽性と高い技術を持った作品を生み出した。合唱との関わりも深く、生涯を通じて100曲を超える佳作を残している。なかでも、ドイツ・レクイエム（1868年）は、彼の名声を確立した、青年期の頂点といえる傑作である。

ブラームスの交響曲第1番が、ベートーヴェンの第10番と称されたように、ベートーベンのすぐ後の世代のように思われる印象があるが、実は当時活躍していたロマン派の作曲家ワーグナーや、ヴェルディ、リスト、ショパン等と比べてもブラームスは約20年も遅れて生まれてきている。その一方で、この面々の時代を切り開く革命的な作品と比すれば作風は保守的で、一時代前のものといえなくもない。ブラームス自身それを自覚し、自らを遅れて生まれてきた人間と称していたところがあるが、それがゆえに、バッハやベートーヴェンなどの作品を研究し、その書法に精通・咀嚼したうえで、自らの作品に取り入れて作曲し、完成度の高い独自の作風を確立してきた。この流行に流されない姿こそ、氏の作品が現在まで残り、我々を魅了することにもつながっているのではないかと思われる。

ドイツ・レクイエム作曲の動機は、師シューマンの非業の死であり、また母の死（1865年）が完成を急がせたとされる。Ein Deutches Requiem（ドイツ語によるレクイエム）とある通り、この作品はラテン語のレクイエム（死者のためのミサ）典礼文ではなく、ルターが訳したドイツ語版聖書から歌詞を抜き出し再構成したものであり、ブラームスが選んだ詩句にも個性が現れている。キリスト教において重要な詩句となる、JesuやChristeは使われず、キリストの復活に関わる部分も注意深く除いた、との作曲家自身の証言もある。かようにこの曲は典礼音楽とは一線を画したブラームス自身の考える、残された者への慰めを音楽に託したものと言えよう。

作品に目を移すと、これもまたブラームスの熟達した技法が全編を支配している。曲の構造は第1曲とそのエコーともいえる第7曲の両端の楽章を挟んでアーチ状の形式となっている。さらに、真ん中の第4曲（三拍子の舞曲）を境に、バリトンソロと後半の大規模なフーガが用いられた、第3曲と第6曲、冒頭が葬送行進曲を呈する第2曲、「あなた方は、今悲しんでいます」のソプラノソロで歌われる癒しの音楽である第5曲と実にバラエティに富んだ構成となっている。

このバラエティに富む曲群をバラバラにせずつなぎとめるフレーズは第1曲の冒頭の合唱部「Selig Sind（「幸いである」）」で鳴らされるわずか三音（F-A-B）からなる音階である。この最初の合唱のアカペラで始まるフレーズがこの後、上昇音型（上行形）あるいは下降音型（下行形）となり調性を変えていたるところに現れる。例えば第3曲の後半部分のテノールから始まるフーガの冒頭部分、第4曲の冒頭のソプラノも全てこの上行形からスタートする。また、第6曲の後半部のアルトから始まるフーガの冒頭（C-H-G）は下行形であり、これも随所に現れる。この小さな動機を積み重ね大伽藍を構築する手法こそ、ベートーヴェンから学んだものであり、これが後の交響曲第1番につながっていくと考えれば、ドイツ・レクイエムの先駆性・重要性が理解できるであろう。

同じ言葉、大事な言葉を何度も繰り返すことも、この曲に顕著に見られる。第5曲の歌詞はほとんどがソプラノソロで歌われ、合唱にはひとフレーズの歌詞しか与えられていないが、この合唱で何度も歌われる「母がその子を慰めるようにわたしはあなたたちを慰める」、この箇所こそ、ドイツ・レクイエムの慰めの概念を典型的に示す部分であろう。一方、この穏やかな慰めの言葉とは対照的な、第3曲や第6曲の最後の部分はフーガの形式で繰り返し語られ、ベートーヴェン交響曲第9番第4楽章の二重フーガや、バッハのロ短調ミサのフーガなどとも比較できる、壮大な栄光の賛歌ともいえる。

またドイツ・レクイエムの曲群が単なる哀悼の音楽でないことを示す例として、第2曲、第3曲、第6曲の調性の変化が挙げられる。いずれの曲も冒頭は短調で始まり、比較的重苦しい曲調から、中間部を挟んで、同じ調性の長調に移行し、壮大なフーガで締めくくられ、死の痛みからそれを乗り越えた歓喜の歌への展開とみれば非常に興味深い。

ブラームスは、「私は喜んで“ドイツ”という語を除き、簡単に“人間”と言う言葉に置き換えたいと公言しても良い。」という言葉を残している。Selig sindから始まり最後にSelig sindで帰ってくる、人間のドラマを描こうとしたといえる。

プリエールの初めてのブラームスは、40年前、黒岩英臣就任2年目の定演だった。同年9月の都民コンクール招待演奏では、東京文化会館大ホールにて、定演で歌った晩年の佳作「５つの歌」作品104を演奏した。以来、ブラームスはプリエールの定番となり、ブラームスの合唱曲をほぼ網羅してきた。ドイツ・レクイエムは、7年前にピアノ連弾で演奏したのだが、黒岩先生との最後の曲として選ぶにあたり、今度は室内楽の伴奏とし、ソプラノソロには、ロンドン響でも共演を務めた大村博美、バリトンソロには、欧州歌劇場でテノール主役を務めてきたプリエールOBの千代崎元昭の陣容で演奏することにした。ブラームスが描き出す慰めの響きのなかで、会場の皆様と共に、これまでの喜びに思いを致せれば幸いである。

（橋本 俊幸）

プロフィール

黒岩 英臣（指揮） KUROIWA Hideomi

1942年東京生まれ。桐朋学園大学音楽学部指揮科において故斎藤秀雄氏に師事。1965年同大学を卒業後、修道士となり1975年まで修道生活を送った。その間、神学、哲学、ラテン語、グレゴリアン、ポリフォニーを学び、典礼音楽の指揮、作曲を行う。1976年、再び音楽に専念。全国の主要オーケストラとの共演を数多く行っており、安定した評価を得ている。自らが敬虔なキリスト教徒ということから、宗教音楽に造詣が深く、オラトリオ、レクイエム、ミサ曲等での名演を重ねている。2000年の年頭には、J.S.バッハ没後250年を記念し、東京オペラシティコンサートホールで「マタイ受難曲」を指揮し、「強固な信心に裏打ちされた演奏には、胸を打つ何かが響いてくる」と絶賛された。1981年～88年九州交響楽団、85年～89年神奈川フィルハーモニー管弦楽団、1988年～94年関西フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者を歴任。2001年から山形交響楽団常任指揮者を務め、2004年から現在に至るまで同団名誉指揮者を務めている。また、1978年より2016年まで桐朋学園大学にて教鞭を執り、多くの著名な指揮者を育て上げた。

1982年、クール・プリエールの常任指揮者に就任。以来41年の間、祈りとロマンに溢れる熱い音楽創りで、聴衆と団員を魅了し続けた。創立50周年の今回を期に、当団の常任指揮者を勇退し、そのタクトを後進に託す。

大村 博美（ソプラノ）OMURA Hiromi

東京藝大大学院修了後イタリア留学中にベルヴェデーレコンクールオペラ部門（ウィーン）、ジャンフランコマズィーニオペラコンクール（イタリア／レッジョエミリア）等の国際コンクール入賞。拠点をフランスに移しマルセイユ国際オペラコンクール優勝。欧米豪の歌劇場や音楽祭で「蝶々夫人」、「オテロ」のデズデモナ、「トロヴァトーレ」のレオノーラ、「フィガロの結婚」の伯爵夫人、難役として知られる「ノルマ」等、常にソプラノの主役で活躍。プッチーニフェスティバル（イタリア／トッレ・デル・ラーゴ）で2018年19年に2年連続「蝶々夫人」、21年に「トスカ」で主演し喝采を浴びた。日本では新国立劇場「蝶々夫人」、「ドン・カルロ」のエリザベッタ等で大成功を収め、近年は東京二期会の蝶々夫人、トスカ、椿姫、演奏会形式「ノルマ」等で喝采を博す。コンサートの分野でも、ロンドン交響楽団とセントポール大聖堂でブラームスの「ドイツ・レクイエム」ソロ、フランス国立管弦楽団とパリのシャンゼリゼ劇場でメンデルスゾーンの「真夏の夜の夢」ソロを務める等高い評価を受ける。東京交響楽団とのベートーヴェン第九のCD、オペラオーストラリアから違う演出で2本の蝶々夫人のDVDが発売中。クール・プリエールとは、一昨年に続いての共演となる。

千代崎 元昭（バリトン）CHIYOZAKI Motoaki

京都大学卒業。尚美学園ディプロマ（大学院大学）首席修了。ベルリン・ドイツオペラ、ヘルシンキ歌劇場専属歌手を経て、フリーランスのオペラ歌手となりイタリア・ミラノに活動拠点を移す。ミラノ・スカラ座、ヴェローナ野外劇場、トリノ王立歌劇場などのオーディション合格。マリオ・デル・モナコ国際声楽コンクール最高位、ベッリーニ国際音楽コンクール入賞。約25年間にわたり世界約40ヶ国の歌劇場に於いてヴェルディ作曲「オテロ」「アイーダ」、ワーグナー作曲「ローエングリン」「ワルキューレ」などテノールの重要な役を数多く歌う。声楽をP.ヴェントゥーリ、P.M.フェラーロ、C.ベルゴンツィ、F.コレルリの各氏に師事。現在、マリオ・デル・モナコ国際門下会会員（イタリア・トレヴィーゾ市）。
『音楽を志した約40年前にプリエールに入団、グレゴリオ聖歌やルネサンス・バロック音楽、現代音楽などを歌い生きた西洋音楽史を学んだ』（本人談）。 創立50周年の今回、クール・プリエールのメンバーとして復帰し、バリトン独唱を担当する。

プリエール室内オーケストラ

今回の定演のために結成された室内オーケストラ。昨年伴奏した桐朋学園卒の若手弦楽四重奏メンバーを主体に、第一線で活躍する実力派で構成。第1バイオリンの山根あずさがコンサート・ミストレスを務める。

山根 あずさ（ヴァイオリン）YAMANE Azusa

桐朋学園大学音楽学部卒業。桐朋オーケストラ・アカデミー研修課程修了。また、国内外のマスタークラスを受講。現在、オーケストラや室内楽を中心に幅広く活動。

金子 都（ヴァイオリン）KANEKO Miyako

桐朋学園大学音楽学部卒業。桐朋オーケストラ・アカデミー研修課程修了。現在、オーケストラや室内楽、リサイタル等で演奏活動を行う。洗足学園音楽大学嘱託演奏員。

本田 梨紗（ヴィオラ）HONDA Risa

桐朋学園大学音楽学部卒業。
*当初出演予定とお知らせしていたヴィオラの大森悠貴は、都合により、本田梨紗に代わりました。

安井 総太郎（チェロ） YASUI Sotaro

桐朋学園大学音楽学部卒業、同大学院を修了。第4回K室内楽コンクールに於いて優秀賞を受賞。現在、リサイタルやオーケストラ、室内楽等で活動している。

瀬戸 槙之介（コントラバス）SETO Shinnosuke

静岡県御殿場市出身。12歳よりコントラバスを始める。桐朋学園大学音楽学部卒業。現在は桐朋学園大学嘱託演奏員を務めるほか、クラシック音楽に拘らず幅広い分野で活動中。

田中 紗貴（フルート）TANAKA Saki

福岡女学院高等学校音楽科、桐朋学園大学音楽学部を卒業。桐朋オーケストラ・アカデミー研修課程修了。一般社団法人アマービレフィルハーモニー管弦楽団正団員。

藤本 茉奈美（オーボエ）FUJIMOTO Manami

東京藝術大学附属音楽高等学校卒業。東京藝術大学大学卒業。東京藝術大学大学院修士課程修了。桐朋オーケストラ・アカデミー研修課程修了。広島ウインドオーケストラ団員。

務川 広貴（クラリネット）MUKAWA Hiroki

桐朋学園大学卒業、同大学研究科修了。２０１９年度桐朋学園大学卒業演奏会、第４１回読売中部新人演奏会に出演。現在桐朋オーケストラ・アカデミーに在籍中。

佐藤 千明（ホルン）SATO Chiaki

桐朋学園芸術短期大学卒業、同大学専攻科修了。フリーランス奏者として関東圏・地方でのオーケストラでの客演を中心に活動。2015年より桐朋学園大学嘱託演奏員。

木村 卓巳（ファゴット）KIMURA Takumi

桐朋学園大学卒業。桐朋オーケストラアカデミー研修課程修了。現在、桐朋学園大学音楽学部管楽器嘱託演奏員。一般社団法人アマービレフィルハーモニー管弦楽団正団員。

秋場 一宏（ティンパニ）AKIBA Kazuhiro

北海道雨竜町出身。洗足学園短期大学卒業。日本フィルや東京シティフィルなど多数の演奏会に出演。ジャンルを問わず活動、海外公演も多い。打楽器グループPPPメンバー。

クール・プリエール（合唱）　Choeur Prière

出演団員　Members 2023　（○：幹事長、◇：団内指揮者、☆：賛助出演）

ご挨拶

本日はお忙しい中、クール・プリエールの創立50周年、そして敬愛する黒岩英臣先生のプリエール常任指揮者勇退を記念する定期演奏会においで頂き、誠にありがとうございます。

プリエールを創設し、そして黒岩先生と出会い、やがて日々の務めに忙殺されるかたわら、20代の血気盛んな若者達が始めたチャレンジは、いつの間にか夫々の人生に欠かせない日常となりました。生涯の伴侶を得た者もいます。今や高齢者が団員の過半を占め、毎週末の練習とその後の仲間との一杯が生きる糧だと語る者もいます。

その50年間の殆どを一緒に歩んでくださった黒岩先生には、感謝の言葉しかありません。先生の指揮棒からは沢山のことを学び、喜びを頂きました。

プリエールの旅路は、新たなご縁を頂いた齋藤友香理先生とともにこれからも続きます。そして我々にとって、毎年の演奏会においで頂く皆様が最大のサポーターです。来年もお目にかかれることを楽しみにしております。

クール・プリエール一同

《クール・プリエール次期常任指揮者のお知らせ》

黒岩英臣氏の勇退に伴い、次期常任指揮者に齋藤友香理氏が就任します。齋藤友香理氏は、研究課程にて黒岩英臣氏に師事、第25回・26回定期演奏会で練習伴奏・練習指揮をして以来となります。来年9月の定期演奏会から、当団の新たな時代のタクトを振る予定です。

齋藤友香理（指揮者）SAITO Yukari

桐朋学園大学を経て渡独。ドレスデン音楽大学大学院指揮科で学び、2015年第54回ブザンソン国際指揮者コンクールで聴衆賞とオーケストラ賞を同時受賞。サイトウ・キネン・フェスティバル松本（現セイジ・オザワ　松本フェスティバル）で青少年のためのオペラ《ヘンゼルとグレーテル》でオペラデビュー、2018年にはバイエルン州立歌劇場でペトレンコのアシスタントをするなど、さらなる研鑽を積むとともに、国内の楽団でも指揮を重ねている。

《次回のお知らせ》～ 齋藤友香理　常任指揮者就任記念 ～

第40回定期演奏会　2024年9月22日（日）2:00pm 浜離宮朝日ホール

ホームページ https://www.choeurpriere.com　お問合わせ　email: info@choeurpriere.com

プリエール年代記

クール・プリエール（合唱）　Choeur Prière

1973年、東京大学柏葉会合唱団の現役・同窓生を中心に創立。初期の指揮者は栗山文昭氏。クール・プリエールとしての演奏活動に加えて、1977年より合唱団O.M.P.のメンバーとしても活動、1978年、1980年、全日本合唱コンクール全国大会にて金賞。
1982年に黒岩英臣氏を常任指揮者に迎え、翌年、アンサンブル・ミニョン（女声）と合併、新生クール・プリエールとして再スタートし、現在に至る。
主としてルネサンス期の宗教曲・世俗曲、ロマン派、近現代に至るヨーロッパのア・カペラ合唱曲をレパートリーに、繊細なアンサンブルを目指している。1982年都民コンクール第一部門第一位、1983年同招待演奏（黒岩英臣指揮）、1984～87年宝塚国際室内合唱コンクール銅賞、TVEC（東京ヴォーカルアンサンブルコンテスト）1995年一般の部金賞、2000年以降では銀賞2回・銅賞3回入賞。

団名の由来。創立後間もなく、団名を決めなくてはというときに、練習の休憩中にアルトのOさんが持ってきたモロゾフのキャンディーを食べていて、ふと缶を見るとPrièreと書いてあった。

F:「これ何と読むの？」　O:「プリエールと読むけど」
F:「響きがいいな、合唱団の名前にクール・プリエールなんていうのはどう？」
O:「悪くないね」　F:「プリエールってどういう意味？」
O:「…（しばらく辞書を引いて）『祈り』って書いてあるけど」
大勢：「おおっ、これじゃ！」

かくして名前はあっと言う間に決まった、というのが由来です。

黒岩先生との出会い。

客演指揮者を探していたころ、黒岩英臣氏の写真を新聞で見かけて、恐れ多いとは思いつつ、幹部ふたりが電話で協議。

Y:「黒岩さんには伝手があるけど・・・」　H:「頼んでみて！」
Y:「断られたんだけど、どうしよう」　H:「もう一度、頼み込んで！」

黒岩先生との最初の演奏会のプログラム。（1982年7月）
このときはジョイント・コンサートだったが、後に、このときを第１回定期演奏会として、それまでの5回分をリセット。

「一度だけでいいから、やってあげなさいよ」との奥様の支援もあって、客演を引き受けてくださることに。
3カ月後、緊張の面持ちで迎えた最初の練習が、ヴィクトリアの宗教曲集でした。振り始めてほどなく黒岩先生の目の色が変わり、一曲歌うごとに「美しい！」を連発。練習の終わりには、「私もまた勉強してきます」とのありがたいお言葉。

練習後、いきつけの恵比寿の酒寮で祝の盃を傾けて、一同、歓喜の言葉を交わし合いながら、夜が更けるまで心地良く酔いしれました。

感動の演奏会が終わり、そのたびに恐るおそる次のお願いをすること数年、やがて（期限のない）常任指揮者ということに。

そして40余年。ついに、もう次のお願いはできなくなりました。

宝塚国際室内合唱コンクール（1987年）

室内合唱コンクールや合唱祭にも出場。第1回演奏会の直後には、東京都合唱コンクール第一部門第1位受賞。翌年、東京文化会館大ホールにて黒岩先生指揮でブラームスを招待演奏。

TVEC金賞（1995年）

黒岩先生が造詣が深いグレゴリオ聖歌は、第4回（1985年）から始め、毎回、その年の曲に合わせて選曲して頂きました。ネウマ譜での歌い方も教わりました。

同年、黒岩先生が神学を学んだカトリック上野毛教会（写真左）にてチャリティーコンサートに参加。

以降、同教会に加えて、調布教会、オルバン教会、カトリック田園調布教会でもチャリティーコンサートに出演。

初めてのコダーイ東京都合唱祭（1984年）

第2回から第23回までの定演は、石橋メモリアルホールにて開催。当初は観客が少なく（せっかく良い音楽をしているのに）「勿体ない！」と黒岩先生が嘆かれたが、それも今は昔。(写真右は1987年)

舞台袖の階段が急で、黒岩先生が登場時、脚がつってしまうこともあったり。

今は昔、子連れ合宿（1987年清里）

ジャヌカン「鳥の歌」の頃（1983年合唱祭）に作ったプリエールTシャツ（写真上：20年後の合宿で）

「愛（？）のデュエット」で鳴らしたテナー2名、昔行きつけの恵比寿の酒寮さいき にて、昨年（写真下：惜しくも今年閉店）

一昨年、かつての定演会場、石橋メモリアルホールにて。（写真上、大村博美さん共演）

海外からの参加、入団。

プリエール50年の歴史は、日本の国際化の時代でもあった。団員の何人かは海外駐在し、現地の合唱団で歌ったり、現地で合唱団を立ち上げたり、中にはテナーF氏のように赴任中も毎年一時帰国して定演に出続けた猛者もいた。現地合唱団での縁で帰国後プリエールに入団したメンバーも5人いる。また、日本赴任中にプリエールに加わって、定演に出演したアメリカ人メンバーもいたり。

世界の主要都市には日本人合唱団がある。2005年、F氏の提唱で7団体が参加する「アジア日本人男声合唱祭」がバンコクで開催され、今も毎年続く。歌は国境を越える!

現在の海外帰国組様ご一行。部外者がごく一部いますが。いきつけの学芸大学旬鮮和彩kouにて。（ただし、それぞれ別の日の練習後。2023春）

現地社長業の傍ら数年前入団、今年目出度く退職し合唱（と酒？）三昧のS氏。（kouにて2023春）

こちら単身渡欧しオペラで活躍したC氏40年を経て、夫人同伴で今年再入団（同じく旬鮮和彩kouにて。2023春）

2018春の箱根男声合宿と
同時開催のO氏慰労会

2018目黒区合唱祭の打上げ
- ソプラノ会 (with顧問) -

コロナ前の日々・・・

2019夏の強化練習＆総決起集会
＠自由が丘

コロナにも負けず！

コロナは教育現場からプロまで、世界中の合唱団を活動停止に追い込んだ。プリエールも練習を中断、2020年の演奏会はやむなく中止したが、団員の合唱への熱意は途切れなかった。Zoomでは不可能なオンラインアンサンブルができるというYAMAHAのSYNCROOMにトライ。オンライン講義などに手慣れているO氏の主催で、1年半の間に37回のZoomミーティングと25回以上のSYNCROOM練習を行い、2021年には定演の再開に漕ぎ着けてプーランクを演奏した。演奏会後はソリストの大村さんも参加のZoom打ち上げだった。

オンライン練習の日々
（2020年夏-2021年夏）

練習会場が制約されるも黒岩先生練習、Zoom中継も（2021年夏、自由が丘にて）

オンライン打上げ！大村さんも参加！

そして、コロナが明けて。
練習は土曜午後になって・・・

まだ日が明るいうちから
ちょいと乾杯！

その後、いきつけの
kouにて利き酒と
料理でご満悦。祝50年？

定例幹部会！

こちら、臨時女子会？

少しは練習
の写真も…

3年ぶりの北條さんボイトレ、
直前の付焼刃でも効果絶大！

久し振りに北條さんを
囲んで前祝！

初オケ合わせ直前、
黒岩先生練習も佳境に！

初オケ合わせでの黒岩先生

定演まで残りあとわずか。
私たちの祈りが届きますように！

団内指揮者のこと。

プリエールでは、多忙なメンバーが多いなか、団内指揮者が中心となって、定演の選曲や共演者の企画などを進め、黒岩先生とのリハ開始に向けて、毎週末の練習に励んでいる。プリエール創立の仕掛人でもあるH氏は、その歴史の大半で団内指揮者を務め、また例年、少人数アンサンブルや珍しい現代曲などチャレンジングな１ステージを指揮してきた。加えて、大手IT企業幹部引退後は、ホームページやYouTube、印刷編集などでもプリエールを支えている。

選曲のこと。

最初のヴィクトリアと第2回のブラームス民謡曲は、黒岩先生に曲集から選んで頂きました。今回の「イエスへの甘美なる思い」、アンコール定番「静かな夜に」は、そのときに初めて歌った曲です。

選曲のこと、その２。　ブラームスはお好き？

以降、黒岩先生は「皆さんのやりたい曲を」とおっしゃって、団に任せてくださったのですが、団のほうも次第に阿吽の呼吸で・・・。

演奏回数Top7：ブラームス20回、ヴィクトリア13回、プーランク11回、バッハ9回、コダーイ8回、ラッスス8回、モンテヴェルディ6回。

「ドイツ・レクイエム」(2016年)
黒岩悠氏・砂原悟氏の連弾伴奏で。

選曲のこと、その３。　「ロ短調ミサ」

黒岩先生に、こちらから「おやりになりたい曲は？」とお尋ねすると、いつも決まってのお答えがバッハ「ロ短調ミサ」でした。それが、第25回を記念しての定演で、やっと実現しました。オケ伴奏も、第1回の「雀のミサ」以来でした。

このとき、齋藤友香理氏が練習伴奏。翌年のブルックナーではオケ付きリハの指揮も。

「ロ短調ミサ」のリハーサルに
熱が入る黒岩先生（2006年）

選曲のこと、番外編。　歌詞のこと

定期演奏会での歌詞は、ラテン語、イタリア語、英語から、ドイツ語、フランス語、マジャール語、教会スラブ語、スロバキア語などなど原語で。黒岩先生指揮での日本語はアンコールの1回だけ。ブラームスの子守歌を、2番で「眠れよ、吾子、」と歌い始めたところ、会場がザワつきました…。

日本語は、団内指揮者で2009年定演「嫁ぐ娘に」だけ。その前年のNHK三善晃特集にて、創立メンバー現役学生のころのライブ録音（柏葉会・混声六連1971年）が放送されたことが契機。

《近年の定期演奏会（第25回以降）》会場は浜離宮朝日ホール、37回のみ石橋メモリアルホール

2008.9.15	第25回記念	バッハ「ミサ曲ロ短調」
2009.9.27	第26回	ラッスス「エレミア哀歌」より聖木曜日の哀歌、三善晃「嫁ぐ娘に」、ブルックナー「ミサ曲第2番」
2010.9.20	第27回	モンテヴェルディ「愛する女の墓に流す恋人の涙」、ブラームス「5つの歌」Op.104、スカルラッティ「悲しみの聖母」
2011.9.18	第28回	ジョスカン・デ・プレ「悲しみの聖母」、プーランク「サルヴェ・レジーナ」、ヴィクトリア「8声のアヴェ・マリア」、サン・サーンス「夜の静けさ」他、リスト「主の祈り」、バッハ「モテット第3番」
2012.9.23	第29回	パレストリーナ「悲しみの聖母」、ディンディア「つれないアマリリ」他、プーランク「悔悟のための4つのモテット」、フォーレ「レクイエム」
2013.9.29	第30回	パレストリーナ/ヴィクトリア「ソロモンの雅歌」より、デュルフレ「グレゴリオ聖歌の主題による4つのモテット」、ジェズアルド「ああ痛ましい喜び」他、バルトーク「4つのスロバキア民謡」、ブラームス「ジプシーの歌」
2014.9.21	第31回	パレストリーナ「サルヴェ・レジーナ」、ヴィクトリア「8声のアヴェ・マリア」、ウィルビー「泣け、我が眼よ」他、ブリテン「聖セシリア賛歌」、コダーイ「初聖体拝領」他、バッハ「モテット第1番」
2015.9.27	第32回	ジョスカン・デ・プレ「あなたの御顔に」より、タリス「エレミアの哀歌」、イェイロ「ウビ・カリタス」他、コダーイ「音楽の作り手」、シューマン「スペインの愛の歌」より、ブラームス「新・愛の歌」より
2016.9.25	第33回	ヴィクトリア「聖週間の応唱集」より、マレンツィオ「むごいアマリリ」他、ブラームス「ドイツ・レクイエム」
2017.9.9	第34回	ヴィクトリア「エレミアの哀歌」より、マクミラン「ミゼレーレ」、ブルックナー・モテット集、マルタン「二重合唱のためのミサ」
2018.9.24	第35回	ヴィクトリア「わがハープは悲しみの音に変わり」、ピツェッティ「レクイエム」、モンテヴェルディ「アリアンナの嘆き」、ブラームス「四重唱曲集」作品31、64
2019.9.29	第36回	スペイン・ルネサンス宗教曲集（ヴィクトリア「わたしは町を歩きまわり」、他）バルト三国合唱曲（ペルト「石膏の壺を持つ女」、他）、フォーレ合唱曲集「マドリガル」「魔神」「ラシーヌの雅歌」、ブラームス「哀悼の歌」
2021.9.26	第37回	パレストリーナ「めでたし、元后」、ヴィクトリア「アヴェ・マリア」、ブラームス「マリアの歌」抜粋、フォーレ歌曲集（独唱：大村博美）、プーランク「スターバト・マーテル」抜粋
2022.9.19	第38回	ラッスス「エレミア哀歌」/「私の魂は悲しんでいる」、ドイツ・ロマン派～近代小品集（ラインベルガー「夕べの歌」、ディストラー「荒野の娘」、他）、ブラームス「運命の歌」、ブラームス「愛の歌」抜粋

＜表紙グラフィックデザイン： 菱沼彩子＞